

44 明治、大正期の埋葬許可証にみる 病と死亡年齢

壹岐裕志

福岡県小郡市(筑後地方)の北端に位置する三国丘陵地帯とその周辺の旧村落において、明治後半から大正時代にかけて埋葬された死亡者の「埋葬許可証留」という綴りを入手した。

その許可証には、死亡者の住所氏名、生年月日、死亡日時の記事の他に、死因(おそらく役場の事務員の手によるものと思われる病名)が加筆されていた。そこで、この資料から、明治、大正期の地方の寒村においてどのような疾病がみられ、また何歳くらいで死亡したかを検証してみることとした。

この地域は、古代の遺跡・遺物が多数発掘されたり、戦場(南北朝時代)と化したところで、地名が示すように、筑前、筑後、肥前の国境に位置し、「三国境石」が現存し

ているなど、歴史的にも興味深い地域であるが、戦前までは現在のように開けておらず、不便で水に乏しく、三〇〇人程度の集落が点在しているに過ぎないところであった。

資料の「埋葬許可証綴」は、三国村大保の明治三二年～三八年、横隈の明治三七年～大正一五年、福童の明治四一年～大正一五年の三大字、五二二名(男二六九・女二五三分で、この地域、期間に見られる病名を分類してみると、明治期では、脳血管疾患(脳出 \langle 溢 \rangle 血)が二三例で最も多く、ついで肺炎(急性・慢性)一六例、結核(肺・腸・喉頭等)一二例、胃腸炎(急性・慢性カタル等)一二例、悪性新生物(胃・子宮・食道癌)六例であった。また、大正期でも脳血管疾患(脳出 \langle 溢 \rangle 血)が三三例で最も多く、ついで肺炎(急性・慢性)三二例、胃腸炎二二例、気管支炎(カタル性)一二例、老衰八例、悪性新生物(胃癌)七例であった。また、幼児では発育不全・栄養不良が明治期で二三例、大正期で一四例がみられた。その他、明治期では腸チフス、疫痢、糖尿病、腎臓病(ブライト病と記載一例)、マラリア、吐乳病、喘息、精神病、尿毒症、

腹膜炎、皮膚病、十二指腸虫病、神経痛、中風、水腫、腹水、癩癩、溺死などと記載されていた。また大正期では、腸チフス(一〇例)、腹膜炎、肝炎、消化不良、初生児黄疸、衝心性脚気、パラチフス、流行性感冒、赤痢、食中毒、電撃死、変死(圧死)なども記載されていた。明治期の全国的な主要死因(三二年以降・厚生省人口動態調査)は、脳血管疾患が最も多く、次いで結核、胃腸炎の順であるが、この寒村地域でも脳血管疾患が最も多く、結核は比較的少なくて肺炎に次いで胃腸炎であった。明治三九年当時、この地域に嘉永元年生まれの医師が二名いたことが記録に残されているが、「許可証」に記載されたものが病名としてあるいは死因としてよいかどうか疑問なものも多く見られ、診断名も極めて曖昧なものであったことが想像される。なお、急性ロースという不明な記載が一例あった。

また、経済的に苦しい村民の立場では、たとえば病に罹っても「田代の売薬」に頼るくらいで、医師に診て貰うこともままならず、死の直前に初めて医師と対面した者も少なくなかったに違いない。

年代別死亡者数については、後日入手した味坂(御原村)、赤川(味坂村)二大字を加算して算出してみると、五大字(明治三〇〜四五年)で、死亡者三七一名(男一九六・女一七五)、その内一歳未満が九七名(男五八・女三九)で全体の二六パーセントを占めた。次いで、七〇歳代、六〇歳代、五〇歳代の順で、最高齢者は九一歳(女)であった。大正期では、四大字で死亡者五五五名(男二五八・女二九七)、その内一歳未満が一五五名(男七六・女七九)で全体の二八パーセントを占め、九〇歳代が四名(女三)いた。

当時乳幼児の死亡率が高かったのは全国的な傾向ではあったが、このように地方の農村地帯で死産、乳幼児の死亡率が極めて高かったことがうかがわれる。

(福岡女学院大学)